農村有配偶女性のライフコースの変容
－ライフ・イベントと職業経歴のコーホート分析－

佐　藤　宏　子

社会環境部門

Changes in Life course of Married Women in Rural Area
－ Cohort Analysis of Life-events and Occupational Careers －

Hiroko SATO

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092,Japan

Abstract

This article aims to analyze the changes in life course of married women in rural area. This study has two viewpoints. The first is to clarify timing, duration and spacing in their life-events, and the second is to clarify their occupational careers. The data were based on the panel studies conducted in 1982, 1993 and 2005 respectively in Asahina-district of Okabe-cho, Shizuoka prefecture that is located in the central part of Japan. This area is famous as a producing district of the high-quality green tea. The sample of these panel studies was comprised of 253 married women who were born in 1924 through 1953. In this study, I divided them into three cohorts to find differences in each cohort. The cohorts are: those who were born in 1924-1934, 1935-1944 and 1945-1953.

The findings of this article are the following two points: there were significant differences in the three cohorts concerning six items: couple's age difference, age of first child birth, age of youngest child birth and occupation before marriage; The occupational career of each cohort is greatly influenced by the timing of experiencing the growing, prosperous, stagnant and declining periods of their green tea production, which makes differences in their life course patterns.

Keywords：life course, cohort, married women, farm-family, life-event, occupational careers, panel-study

１．ライフコース研究の展開と特徴

誰もが同じように生まれて死んでいくのであれば、人の一生はサイクルとしてとらえられ、モーダル・パターンが重視される。三沢は「かつては『何歳になったら何をする』という年齢規範が確立されており、コースは１つではないにせよ、社会的に正当化され規範化された多数派のライフコースというものがあった。個人はそれに自分なりのアレンジを加えて適応するにせよ、あるいは稀にそれらから逸脱するにせよ、そのような規範的ライフコースに照らし合わせながら自分の人生を設計することができた」と指摘している（三沢，1989）。このような社会では、生理学的な加齢が重視されるとともに、

人は家族のなかで成長し、家族を形成し、家族のなかで生を終えることが前提とされるため、「個人に注目する」という研究視角、人生研究や生活史研究における文化的・歴史的コンテクストに目が向けられることはほとんどなかった。

しかし、1960年代以降、アメリカにおいて大衆・市民運動が高まると、家族社会学研究における没歴史性への反省と、フランスのアナール学派やイギリスのケンブリッジ学派の社会史研究の影響を受けて、家族史研究への関心が高まった。こうした社会的状況のもと、個人が生まれてから死ぬまでの規則性をとらえるライフサイクル論もしくは家族周期論に代わる新しい視点として、多様な個人の人生を想定するライフコースの概念が1960年代後半のアメリカを中心として登場した。

個人の人生を形づくる時間の流れには、暦年齢とともに経過する個人的時間、年齢規範で区切られた社会的時間のほかに、歴史的時間がある。アメリカ家族社会学に歴史的視点を導入した第一人者Harevenは、歴史的時間には死亡率や出生率の変化などの人口学的変化、社会規範の変化、経済水準・医療水準の変化などの通時的変化、さらには不連続性をもたらす突発的な歴史的事件、すなわち戦争や大恐慌の勃発のような歴史的な出来事などがあるとしている(Hareven, 1982)。また、Elderは、大恐慌の起こる直前からの約30年間のパネル・データを分析した名著『大恐慌の子どもたち』において、子どもたちがある生活年齢で大恐慌という歴史的事件を経験したことが、その後どのような人生観や社会的態度を形成することになり、そのことが彼らのライフコースにおける出来事(ライフ・イベント)経験のタイミングや配列にどのような影響を及ぼすことになったかを明らかにした（Elder, 1974)。彼女は、家族と個人の人生を歴史的時間のなかで位置づけるライフコースの視点を確立するとともに、ライフコースを「年齢に秩序づけられた社会的パターンであり、社会制度によって具象化され、また歴史的変動の影響をうける」と定義した(Elder, 1992)。わが国でもとりわけ80年代以降、ライフコース研究は個人の加齢過程を社会的・歴史的コンテクストのなかに位置づけ、多元的・動態的に把握しようとするアプローチとして、社会学における一領域を獲得するに至っている。

本稿との関連でライフコース研究の特徴を簡潔に述べると、次の３点が指摘できる。まず、第１の特徴は、個人の役割移行過程に焦点をあて、その過程における出来事経験のタイミングを社会的・歴史的文脈との関連の下でとらえようとする点にある。個人は、その生涯を通じて、定位家族、学校、職場、地域社会、生殖家族など、さまざまな集団・生活領域に参加したり、離脱したりという過程を複合的・累積的に繰り返す。ライフコースの視点では、加齢する個人を社会変動の影響下にあるもの、また社会変動の担い手にもなり得るものとして位置づける（春日井，2009)。第２の特徴として、ライフコース研究は、多様な個人の人生への歴史的経験の影響を解明することを重要な課題としていることから、長期的縦断研究の方法が用いられる。しかし、同一対象者を長期的に追跡する縦断研究には、大きな経済的負担、調査デザイン設計の難しさ、対象者確保の困難性がある。さらに、第３の特徴として、データを分析するアプローチの手法としてコーホート分析（cohort analysis）が取り入れられる。コーホート（cohort）とは、出生、結婚などの同時体験集団を指す。コーホート分析は、歴史的出来事を同じような年齢で経験した人々の統計的集団、すなわちコーホートに注目し、コーホートごとのライフコース・パターンを比較することによって、諸個人の多様な生活史のなかに一定の規則性を発見しようと試みる技法である。

本稿では、1982年～2005年の23年間に中部日本の高級茶生産地域で実施した縦断研究によって得られた３時点パネル調査データを用いて、大正末期から昭和20年代中頃までの30年間に出生した有配偶女性のライフコースの特徴と変化の実態について、主にライフ・イベント経験の時機（timing）・期間（duration）・間隔（spacing）および職業経歴の視点から、コーホート分析することを目的としている。

２．調査研究とコーホート分析の概要

1982（昭和57）年、1993（平成５）年、2005（平成17）年に、日本有数の茶の生産地である静岡県志太郡岡部町朝比奈地域（現静岡県藤枝市岡部町）において、同一対象者を調査対象とする縦断研究を実施した。本稿では、３時点パネル調査が完了した有配偶女性253人（2005年時点で53～72歳）について、対象者の出生年により「大正・昭和ヒトケタ生まれ」、「昭和10年代生まれ」、「昭和20年代生まれ」の３つの出生コーホートに区分して分析を行った。「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホートは1924（大正13）年から1934（昭和９）年に出生した107人（2005年時点で71～82歳、平均年齢75.5歳)、「昭和10年代生まれ」コーホートは1935（昭和10）年から1944（昭和19）年に出生した84人（2005年時点で61～70歳、平均年齢65.6歳)、「昭和20年代生まれ」コーホートは1945（昭和20）年から1951（昭和26）年に出生した62人（2005年時点で54～60歳、平均年齢56.7歳）である。

分析項目は、結婚、第１子出産、末子出産、子どもの学校卒業、子どもの結婚、子どもの結婚完了、初孫の誕

生、定年または農業からの引退、夫の定年または農業からの引退、夫の死亡といったライフ・イベント、配偶者選択の方法、出生児数、出産期間、子育て期間、結婚前から2005年までの間の４時点における職業経歴である。本稿では、ライフ・イベントを経験した時機（timing）、移行期間(duration)、間隔(spacing)について、コーホート別に分散分析を行い、コーホート間の差異を明らかにするとともに、BONFERRONI法を用いて多重比較を実施し、コーホート間の変化について検討、考察した。

３．ライフ・イベントを経験した年齢と期間

表１は、コーホート別にみたライフ・イベント経験時の平均年齢を示している。

３．１　結婚期間と時期、結婚年齢と夫婦の年齢差

「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホートは1943～61年（昭和18～36年）の18年間、「昭和10年代生まれ」コーホートは1954～70年（昭和29～45年）の16年間、「昭和20年代生まれ」コーホートは1965～79年（昭和40～54年）の14年間に結婚している。

まず、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホートは、「1950～54年」に結婚した者が42.1％と最も高率であり、次いで「1955～59年」が30.8％と、50年代に結婚した者が72.9％を占めている。次に、「昭和10年代生まれ」コーホートは、「1960～64年」に結婚した者が46.4％、次いで「1965～1969年」が25.0％と、60年代に結婚した者が71.4％を占めている。これに対して、「昭和20年代生まれ」コーホートは全員が1965年以降に結婚しており、1970年代に結婚した者が64.5％を占めている。

次に、結婚年齢についてみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は「20～24歳」で結婚した者が69.2％と、「昭和10年代生まれ」の81.0％、「昭和20年代生まれ」の79.0％よりも低率であり、「25～29歳」が25.2％と高率である。「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は11～22歳で終戦を迎えており、第二次大戦と終戦後の混乱の影響を受けて結婚が遅れていることが示唆される。また、「昭和10年代生まれ」と「昭和20年代生まれ」を比較すると、「25～29歳」で結婚した者の割合が「昭和10年代生まれ」では11.9％に対して、「昭和20年代生まれ」では19.4％と高率であり、結婚年齢は、農村地域においても70年代以降、徐々に広がりをみせていることが明らかになった。

一方、対象者の夫の平均結婚年齢は26.2歳である。結婚年齢をコーホート別にみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は「25～29歳」で68.9％、「20～24歳」で25.5％が結婚しており、ほぼ全員が20代で結婚している。「昭和10年代生まれ」も「25～29歳」に60％強が集中しており、次いで「20～24歳」の23.8％で、85％弱が20代で結婚している。これに対して、「昭和20年代生まれ」は「25～29歳」が60％を下回り、「20～24歳」が21.3％、「30～34歳」が16.4％と、結婚年齢の広がりがみられる。また、30代で結婚を経験した者の割合は、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」が5.6％、「昭和10年代生まれ」が13.1％、「昭和20年代生まれ」が19.7％と、若年のコーホートほど高率である。

次に、結婚時の夫婦の年齢差についてみてみよう。全対象者の平均年齢差は3.4歳であるが、一元配置分散分析、BONFERRONI法を用いた多重比較により、コーホートによる有意な差がみられる。まず、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」では「夫が１～２歳年上」と「夫が３～４歳年上」がそれぞれ30％弱と高率であるが、「夫が年下」「夫が５～６歳年上」「夫が７歳以上年上」についてもそれぞれ10％強となっており、他の２つのコーホートに比べてバラツキが大きい。これに対して、「昭和10年代生まれ」では「夫が３～４歳年上」が34.5％、次いで「夫が５～６歳年上」が26.2％と高率であり、夫との年齢差は「３～６歳」に集中している。また、「昭和20年代生まれ」では、「夫が３～４歳年上」が40％以上を占めている。

３．２　配偶者選択の方法

配偶者選択の方法には、コーホート間で有意な差がみられる（ *** $p < 0.001$）。「見合い」が「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は71.0％、「昭和10年代生まれ」は66.7％と高率であるのに対して、「昭和20年代生まれ」は46.8％と半数を下回り、「恋愛」が「見合い」を上回っている（表２）。全国値では1970（昭和45）年に「恋愛」が「見合い」を上回ったことが知られているが、本地域においても1970年代に64.5％が結婚した「昭和20年代生まれ」のコーホートにおいて「恋愛」と「見合い」の比率の逆転が認められることが明らかになった。この結果は、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」と「昭和10年代生まれ」の２つのコーホートと、「昭和20年代生まれ」コーホートには、配偶者選択という結婚の契機、夫婦関係の形成過程に質的な差異があることを示唆している。

３．３　出生児数

全対象者の平均出生児数は2.7人である。これをコーホート別にみると、平均出生児数は「大正・昭和ヒトケタ生まれ」2.9人、「昭和10年代生まれ」2.7人、「昭和20年代生まれ」2.5人と、若年のコーホートほど少子化する傾向が認められる。とりわけ、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」と「昭和20年代生まれ」の平均出生児数は、一元配置分散分析、多重比較から有意な差が見られ、出

生児数の減少が明らかになった（表３）。

また、表３に示したように、いずれのコーホートでも出生児数「３人」が最も高率であり、次いで「２人」の順であるという共通点が指摘できる。「３人」出産した者は「昭和20年代生まれ」53.2%、「昭和10年代生まれ」47.6%、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」41.1%、さらに、出生児数が「２人」または「３人」の対象者は、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」69.1%、「昭和10年代生まれ」88.1%、「昭和20年代生まれ」90.3%である。一方、「４人」以上の子どもを出産した者は、「昭和20年代生まれ」が3.2%、「昭和10年代生まれ」が10.7%に対して、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は24.3%と、ほぼ４人に１人が「４人」以上の子どもを出産している。ところで、子ども「なし」は「大正・昭和ヒトケタ生まれ」１人、「昭和10年代生まれ」０人、「昭和20年代生まれ」２人と、調査対象者253人中３人にすぎない。

したがって、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」と「昭和20年代生まれ」の平均出生児数の差異は、「昭和20年代生まれ」の対象者の90%以上が出生児数２～３人に集中しているのに対して、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は出生児数のばらつきが大きく、ほぼ４分の１の対象者が「４人」以上の子どもを出産していることによって生じているといえよう。

３．４　第１子の出産年齢

全対象者の第１子出産時の平均年齢は24.4歳、最年少は19歳、最高齢は32歳である。また、コーホート別に第１子出産時の平均年齢をみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は25.0歳、「昭和10年代生まれ」は23.8歳、「昭和20年代生まれ」は24.2歳であり（表１）、一元配置分散分析、多重比較から「大正・昭和ヒトケタ生まれ」と「昭和10年代生まれ」とのコーホート間に有意な差が認められた。また、第１子の出産年齢は結婚年齢の影響を受けており、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は、第１子を「20～24歳」と「25～29歳」で出産している者がいずれも46.7%であるのに対して、「昭和10年代生まれ」では「20～24歳」が66.7%と高率である。

３．５　末子の出産年齢

全対象者の末子出産時の平均年齢は29.8歳、最年少は22歳、最高齢は42歳で、20年の開きがある。一元配置分散分析、多重比較から「大正・昭和ヒトケタ生まれ」と「昭和10年代生まれ」のコーホート間に有意な差が認められた。　まず、末子出産時の平均年齢をコーホート別にみると「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は30.5歳、「昭和10年代生まれ」は29.2歳、「昭和20年代生まれ」は29.3歳であり、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は「昭和10年代生まれ」に比べて末子の出産年齢が有意に遅い（表１）。すなわち、「昭和10年代生まれ」と「昭和20年代生まれ」の両コーホートは、50～55%の対象者が「25～29歳」、次いで33～35%が「30～34歳」で末子を出産しているのに対して、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は「30～34歳」が48.6%と約半数を占め、さらに、「35～39歳」で末子を出産している者も10%を超えている。

このように「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホートにおける末子の出産年齢が他のコーホートよりも高い背景として、「25～29歳」で結婚した者が高率である点、４人に１人が「４人」以上の子どもを出産している点を指摘することができる。

３．６　出産期間

第１子出生から末子出生までを出産期間として、コーホート別に分析を行った。全対象者の出産期間の平均は5.6年である。コーホート別に平均出産期間をみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」が5.9年と最も長く、次いで「昭和10年代生まれ」の5.4年、「昭和20年代生まれ」の5.2年の順であるが、コーホートによる有意な差は認められない（表１）。最長出産期間は「昭和10年代生まれ」の対象者の19年である。

次に、各コーホートにおける出生児数と出産期間の平均値を示すと「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は2.9人の子どもを5.9年間に、「昭和10年代生まれ」は2.7人の子どもを5.4年間に、「昭和20年代生まれ」は2.5人の子どもを5.2年間に出産していることが明らかになった。

また、出生児数別に出産期間を分析すると、出生児数が多いほど出産期間が長期間にわたっている（ *** $p < 0.001$）。まず、出生児数「２人」では平均出産期間が3.3年（最小１年、最長11年）、出生児数「３人」では平均出産期間が6.3年（最小３年、最長19年）、出生児数「４人」では平均出産期間が8.3年（最小３年、最長14年）、出生児数「５人」では平均出産期間が9.1年（最小５年、最長14年）である。ところで、対象者のなかで最大出産児数は「昭和10年代生まれ」の対象者の「６人」であるが、出産期間は11年となっている。

３．７　子どもが学校を卒業した年齢

子どもがいない者（「大正末期・昭和ヒトケタ生まれ」１人、「昭和20年代生まれ」２人）、子どもに障害者があるため未就学の者（「昭和20年代生まれ」１人）、未回答（「大正末期・昭和ヒトケタ生まれ」３人）の７人を除く対象者246人は、全員子どもが学校を卒業している。

まず、対象者全員の子どもが学校を卒業した平均年齢

は48.6歳であり、最年少は39歳、最年長は61歳であった。コーホート別に平均年齢をみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は49.2歳、「昭和10年代生まれ」は48.1歳、「昭和20年代生まれ」は48.6歳で、有意な差はみられない（表１）。いずれのコーホートにおいても、子どもが学校を卒業した年齢は「45～49歳」が45～50％を占めており、次いで「50～54歳」が「大正・昭和ヒトケタ生まれ」では35.9％、「昭和10年代生まれ」では25.0％、「昭和20年代生まれ」では42.4％となっている。従って、40代後半から50代前半の時期に、子どもが学校を卒業した対象者が「大正・昭和ヒトケタ生まれ」で82.5％、「昭和10年代生まれ」で75.0％、「昭和20年代生まれ」で88.2％と圧倒的多数を占めている。また、「昭和20年代生まれ」では、54歳以前にすべての子どもが学校を卒業しており、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」や「昭和10年代生まれ」よりも子どもの学卒時期は早まっている。

３．８　子育て期間

「第１子出生」から「すべての子どもが学校を卒業する」までの期間を「子育て期間」として、コーホート別に分析を行った。対象者全員の子育て期間の平均は24.3年である。コーホート別に平均子育て期間をみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は24.2年、「昭和10年代生まれ」は24.3年、「昭和20年代生まれ」は24.5年で、子育て期間にはコーホートによる有意な差は認められない（表１）。対象者の圧倒的多数が、20～29年間の子育て期間を経験しており、最短子育て期間は15年、最大子育て期間は38年であった。

３．９　子どもが最初に結婚した時の年齢

調査対象者のうち、「昭和20年代生まれ」では「子どもなし」の対象者２人に加えて、「全ての子どもが未婚」が13人（21.0％）いる。また、「昭和10年代生まれ」では「全ての子どもが未婚」が３人、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」では「子どもなし」が１人、「全ての子どもが未婚」が２人、未回答が２人いる。これらの者を除く230人を分析対象者とした。

まず、分析対象者230人の「子どもが最初に結婚した時」の平均年齢は50.5歳、最年少は39歳、最年長は68歳である。これをコーホート別にみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は50.8歳、「昭和10年代生まれ」は50.2歳、「昭和20年代生まれ」は50.6歳で、「子どもが最初に結婚した時」の平均年齢にはコーホートによる有意な差はみられない（表１）。すなわち、コーホートにかかわらず、多くの分析対象者が40代後半から50代前半の時期に初めて「子どもの結婚」を経験している。

ところで、「昭和20年代生まれ」の分析対象者は2005年時点で54歳から60歳である。この「昭和20年代生まれ」の分析対象者60人のうち13人（21.7％）は、2005年時点で「子どもの最初の結婚」を経験していない。「昭和20年代生まれ」のコーホートの子世代において晩婚化、非婚化がみられるかどうかについては、今後の「昭和20年代生まれ」の動向に注目したい。

３．10　子どもの結婚完了時の年齢

対象者全体の「すべての子が結婚した」平均年齢は57.5歳である。ただし、子どもの結婚が完了した対象者は、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」77人（73.3％）、「昭和10年代生まれ」47人（56.0％）、「昭和20年代生まれ」14人（22.6％）となっている。また、各コーホート別に「子どもの結婚が完了した」最少年齢をみると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」と「昭和10年代生まれ」では47歳、「昭和20年代生まれ」では48歳である。「大正・昭和ヒトケタ生まれ」の対象者は2005年時点で71～81歳となっており、この時点で対象者の25.7％に未婚子がいるという実態は、本地域において結婚難が深刻化し、対象者世帯における世代更新が妨げられていることを示している。

３．11　初孫誕生の年齢

対象者の中で初孫の誕生を経験している者の比率は、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」の96.2％（105人中101人が経験）、「昭和10年代生まれ」の92.8％（83人中77人が経験）、「昭和20年代生まれ」の58.3％（60人中35人が経験）である。

また、対象者全員の初孫誕生時の平均年齢は52.4歳であり、コーホート別にみると「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は53.2歳、「昭和10年代生まれ」は51.8歳、「昭和20年代生まれ」は51.4歳である。いずれの出生コーホートでも「50～54歳」で初孫誕生を経験する割合が最も高く、次いで「大正・昭和ヒトケタ生まれ」では「55～59歳」、「昭和10年代生まれ」と「昭和20年代生まれ」では「45～49歳」の順となっている。ただし、「昭和20年代生まれ」（2005年時点で54～60歳）は、初孫誕生の経験者が58.3％にとどまっており、今後、初孫誕生時の平均年齢は上昇することが予想される。

３．12　定年または農業から引退した年齢

「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は2005年時点で73歳から81歳と高齢であるが、本質問に回答した105人のうち農業または農業以外の仕事に就いている「現役」の者は64.8％（68人）と約３分の２に達しているのに対して、「定年または農業からの引退」を経験した者は30.5％

（32人）にとどまっている。「大正・昭和ヒトケタ生まれ」で、これまで仕事に就いた経験のない者は4.8%（５人）である。次に、2005年時点で61歳から70歳の「昭和10年代生まれ」では、本質問に回答した84人のうち農業または農業以外の仕事に就いている「現役」の者が79.8%（67人）と８割に達しており、「定年または農業からの引退」を経験した者は19.0%（16人）と少数派である。「昭和10年代生まれ」で、これまで仕事に就いた経験のない者はわずかに１人である。さらに、2005年時点で54歳から60歳の「昭和20年代生まれ」では、本質問に回答した59人のうち農業または農業以外の仕事に就いている「現役」の者が88.1%（52人）と９割弱を占めている。「定年または農業からの引退」を経験した者は5.1%（３人）、これまで仕事に就いた経験のない者は6.8%（４人）である。以上の結果から、現役率は「大正・昭和ヒトケタ生まれ」64.8%、「昭和10年代生まれ」79.8%、「昭和20年代生まれ」88.1%であり、70歳を過ぎてもなお多くの者が職業生活を継続しているという農村女性の実態が明らかになった。

３.13　夫の定年・農業からの引退、夫の死亡した年齢

2005年時点で「夫の定年・農業からの引退」を経験した対象者は、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」の46.3%、「昭和10年代生まれ」の34.5%、「昭和20年代生まれ」の10.5%となっている。「夫の定年・農業からの引退」は今後本格化していくであろう。また、夫と死別した対象者は「大正・昭和ヒトケタ生まれ」の18.9%（20人）、「昭和10年代生まれ」の13.1%（11人）、「昭和20年代生まれ」の8.2%（５人）である。

４．コーホートによる職業経歴の特徴

対象者の結婚前、1982年、1993年、2005年の４時点における職業経歴を分析検討した（表４）。まず、対象者全員についてみると、結婚前に農業者であった者は49.4%であるが、1982年時点で農業に従事する者は73.5%と対象者の４分の３を占めている。従って、対象者の４人に１人は結婚後、婚家で初めて農業者となったことがわかる。しかし、農業者の割合は1993年には54.2%まで激減しており、1982年から93年の11年間に対象者の約４分の１が離農している。また、2005年には「無職」者が24.9%となり、４分の１の対象者が職業生活から引退している。

次に、対象者の職業経歴をコーホート別に分析してみよう。まず、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は、農業者率が、結婚前73.8%、1982年80.4%と非常に高率であるが、1993年には66.4%へと減少している（表４）。表５は、82年から93年の11年間における各コーホートの職業移動を明らかにするために、82年時点で農業者だった対象者について、93年時点での職業を示している。これによると、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」は、82年時点で農業者だった86人のうち25人（29.1%）が離農している。離農した者はパート就労（２人）、管理事務職（１人）への移動がみられるが、それ以外の22人は無職となっている。すなわち、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」の離農は、他の職業への移動ではなく、職業生活からの引退が大勢を占めている。また、表４からは、2005年時点で「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホートの対象者は71～81歳であるにもかかわらず、職業生活から引退した者は35.5%にとどまり、対象者の64.5%が農業またはその他の仕事を継続していることが明らかになった。

「昭和10年代生まれ」は、結婚前から農業に従事していた者が42.9%と「大正・昭和ヒトケタ生まれ」の73.8%に比べると低率であるが、82年時点の農業者率は70.2%と大幅に増加している。すなわち、82年時点で農業に従事している対象者のうち40%が、結婚後初めて農業者となっている。しかし、82年に70%を超えていた農業者率は、93年には51.2%へと減少している（表４）。82年時点で農業者だった対象者59人の93年時点での職業をみると、パート就労７人、無職４人、労務職１人、商工自営業１人である（表５）。そして、2005年には対象者の20%弱が職業生活から引退している（表４）。

「昭和20年代生まれ」の農業者率は、結婚前16.1%、1982年66.1%、93年37.1%と大きな変化を示しており、「昭和20年代生まれ」コーホートの職業移動の激しさがうかがわれる（表４）。1982年時点で農業に従事している者のうち75.6%が、結婚後はじめて農業に従事している。そして、93年には82年時点で農業者だった対象者のうち48.8%が離農し、パート就労（９人）、労務職（４人）、商工自営業（２人）への職業移動がみられる（表５）。そして、2005年には16.1%が職業生活から引退している。

５．３つのコーホートにおけるライフコースの特徴

３章と４章の分析によって、1924（大正13）年から1953（昭和28）年に出生した同一町内・地区の茶生産地域の有配偶女性を出生の時期によって３区分した長期的縦断研究から、夫婦の年齢差、配偶者選択の方法、結婚前の職業、出生児数、第1子出産年齢、末子出産年齢、職業経歴におけるコーホート間の差異が明らかになった。まず、夫婦の年齢差では、「昭和10年代生まれ」と「昭和20年代生まれ」に比べて「大正・昭和ヒトケタ生まれ」には大きなバラツキがみられ、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホートに第二次大戦と終戦後の混乱が影響を

及ぼしたことが示唆された。また、配偶者選択の方法は、「昭和20年代生まれ」コーホートにおいて、見合い結婚から恋愛結婚への移行がみられた。出生児数は「大正・昭和ヒトケタ生まれ」と「昭和20年代生まれ」のコーホート間で少子化傾向が明確に認められた。また、第１子出産年齢と末子出産年齢は「大正・昭和ヒトケタ生まれ」に比べて「昭和10年代生まれ」に若年化の傾向が認められた。これらの分析結果をふまえたうえで、終章では、３つのコーホートがたどってきた加齢の過程に社会的・歴史的コンテクストを重ね合わせ（図１）、各コーホートのライフコース・パターンの特徴について考察する。

５．１　「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホート

本コーホートの対象者は、1924（大正13）年から1934（昭和９）年に出生し、第２次大戦終戦を11～21歳で体験している。対象者は、満州事変（1931年）、「満州国」建国（1932年）、日中戦争（1937年）などの中国への侵略と国際的孤立、軍部による戦時体制の強化、戦時教育体制、挙国一致の戦意高揚一色の国民生活、そして戦局の悪化と敗戦後の混乱のなかで乳幼児期、学童期、青年期をすごしている。したがって、対象者は満州事変以降の極端な軍国主義教育を受け、封建的な人間関係、家制度のもとで成長している。そして、ほぼ全員が昭和20年代、昭和30年代前半に結婚している。平均結婚年齢は23.2歳であるが、20～24歳で約70％、25～29歳で約25％の者が結婚している。配偶者選択の方法は見合い結婚が70％を超えており、恋愛結婚は14.0％と少数派である。

本地区において農地改革を推進した農地委員会は1946（昭和21）年11月に発足し、1947（昭和22）年から改革事業に取りかかり、農地解放は1950（昭和25）年までにほぼ終了している。農地改革は地主制度を解消することはできたが、各自が工作していた小規模な土地をそのまま自作地にきりかえただけで、零細農耕制を根本的に解決することはできなかったといわれている。本地区でも農地改革の結果、自作農家の比率は高まったが、多くは小規模経営であり、限られた狭い土地での農業経営の方向として、果樹（みかん）と工芸作物（茶）という特産品的作物で生産性を向上させる努力が続けられた。こうした社会的状況下で、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」コーホートの８割の者が、農家の嫁として厳しい農作業に従事するとともに、家制度の残存のなか封建的な家族関係、姑への絶対服従、嫁いびりなどの嫁姑関係を経験している（佐藤，2007）。また、本コーホートの対象者のなかには、1954（昭和29）年の岡部地区初の医院である三輪医院の開業、1955（昭和30）年の旧岡部町と旧朝比奈村の合併による岡部町の誕生を経験した者もいる。こうしたなかで、本コーホートは、平均2.9人の子どもを5.9年間に出産している。

５．２　「昭和10年代生まれ」コーホート

本コーホートの対象者は、1935（昭和10）年から1944（昭和19）年に出生し、１～９歳で終戦を迎えており、戦争末期、終戦直後の物資欠乏期に乳幼児期、戦後の混乱期に学童期を過ごしている。したがって、本コーホートは軍国主義の否定、教育の民主化、国民生活の復興のなかで小学校、中学校生活を送り、昭和30年代（1955～1964年）に20歳を迎え、1955年から1969年の高度経済成長期に大多数の者が結婚している。平均結婚年齢は22.4歳、対象者の80％以上が20～24歳で結婚している。配偶者選択の方法は見合い結婚が66.7％、恋愛結婚が20.2％であり、依然として恋愛結婚は少数派である。

本コーホートが結婚した時期の岡部町は、図１に示したように生みかんと缶詰の輸出の増加、国内消費の増大によって、みかん生産量が著しい伸びを示している。また、岡部町の北部に位置する朝比奈地域の山間地では、みかんに次ぐ重要な農産物として、かぶせ茶、玉露といった上質茶の栽培が年々盛んになっている。1967（昭和42）年の岡部町は、農家１戸当たりの農業粗収入が静岡県で第１位、農業専従者１人当たり農業粗生産額（労働生産性）が５位と、静岡県を代表する果樹工芸作物地域へと発展している。「昭和10年代生まれ」コーホートは、このようなみかん生産の最盛期、茶栽培の発展期に結婚しており、結婚前から農業に従事していた者は42.9％と半数を下回っているが、対象者の30％弱が結婚後初めて農業に従事し、農家の嫁として厳しい農作業を経験している。また、1950年代後半から60年代にかけて農家の生活改善運動が進められたが、依然として家制度は残存しており、多くの対象者が封建的な家族関係、嫁姑関係を経験している。こうしたなかで、「昭和10年代生まれ」コーホートは2.7人の子どもを5.4年間に出産している。

５．３　「昭和20年代生まれ」コーホート

本コーホートは、1945（昭和20）年から1951（昭和26）年に出生した戦後生まれ世代である。第２次大戦後の戦後復興が終了したことを指して『経済白書』に「もはや戦後ではない」と副題がつけられ話題になった1956年（昭和31）年には５～11歳であり、高度経済成長期に戦後の民主主義教育を受けて小学校・中学校生活を送っている。そして、東海道新幹線開業、第18回オリンピック東京大会開催により、わが国が先進国の仲間入りを国際社会に印象づけた1964（昭和39）年に13～19歳となり、高度経済成長のひずみが顕在化した1965（昭40）年から

1971（昭46）年の間に20歳を迎え、1965年から1970年代にかけて全員が結婚している。配偶者選択の方法は前述したように恋愛結婚が50.0％となり、見合い結婚の46.8％をわずかに上回っている。

本コーホートが結婚したこの時期、岡部町では温州みかんの価格が暴落しみかん生産が衰退する一方で、茶生産が最盛期を迎えている（図１）。岡部銘茶の名声は、1969（昭和44）年の全国茶品評会で岡部の玉露とかぶせ茶が農林大臣賞を獲得したことによって全国に広まった。そして、1972（昭和47）年に開かれた全国茶品評会の玉露の部で、２年連続農林大臣賞を獲得し、１席の大半を朝比奈玉露が独占したこと、さらに産地賞も獲得したことによって、岡部町は日本を代表する「お茶どころ」としての地位を確立した。その後、茶の栽培面積、生産量は拡大を続け、1981（昭和56）年には朝比奈地域の６つの茶園が献上茶指定園に選ばれ、町をあげての盛大な記念式典が開催されている。本コーホートは茶生産の隆盛期に結婚しており、結婚前農業に従事していた者は16.1％と低率であるが結婚後農業に従事した者が多く、1982年時点で66.1％が農業者となっている。1976年（昭和51）には、岡部町の南部地域である旧岡部地域では、岡部バイパスが開通しベットタウンの造成や事業所・工場建設が進み、人口の急増、農業の衰退と就業構造の変化といった家族・地域社会の激変が生じている。しかし、岡部町の北部地域である朝比奈地域は日本有数の高級茶の生産地として活気に満ちており、1980年代前半までは茶生産の最盛期が続いている。朝比奈地域で農家率の減少、兼業化、町外通勤者増加などの人口流動性の高まり、生活圏の拡大などが顕在化しはじめるのは1980年代の終わり頃からである。そして、朝比奈地域の茶生産が徐々に停滞・縮小する1990年代に40代となった「昭和20年代生まれ」コーホートは、1982年時点で農業者であった者の半数弱が、農外就労への職業移動を経験している。このように激動する農業経営と地域社会の変貌の中で激しい職業移動を経験した「昭和20年代生まれ」コーホートは、平均2.5人の子どもを5.2年間で出産している。

６．おわりに

ライフコースの視点が、20世紀を通しての劇的な社会変動ならびに人生経験の変動を背景に誕生したことは、すでに第1章で述べたとおりである。Mayerらはライフコース概念について、「ライフコースとは、社会構造の一つの要素であり、それは個人の行為、組織的過程、そして制度的・歴史的諸力の所産である。ライフコースは、個人の伝記物語ではなく、社会的にパターン化された軌道なのである」と説明している。本研究の対象者たちは、1924年から1953年に出生し、激動の昭和期を同質性のきわめて高い同一農村地域内で生活してきた有配偶女性たちである。23年間にわたる追跡パネル調査データを用いて彼女たちのライフコース・パターンを観察した結果、次の２点が浮かびあがってきた。

まず、第1に、ライフコース視点の誕生は、「みなが同じような人生を送ることのできる社会」から「いろいろな人生を送ることができる社会」へと社会原理が発展的に進化した結果であると述べられている（嶋崎，2008）が、本対象者たちのライフコース・パターンからは、３つのコーホートにおける類似性や連続性が多くの側面で観察された。一方、コーホートによる差異がみられた項目では、若年のライフコースほど画一化・平準化しているという戦後日本、とりわけ高度経済成長期以降の都市部におけるライフコース・パターンの特徴が認められた。また、第２に、各コーホートのライフコース・パターンは、主にどのタイミングで茶生産の発展・隆盛・停滞・衰退を経験するかによって決定されており、産業時間の推移がライフコースのパターン化に大きな影響力を及ぼしていることが実証的に明らかになった。今後は、「大正・昭和ヒトケタ生まれ」「昭和10年代生まれ」「昭和20年代生まれ」の３つのコーホートには固有のライフコース・パターンが組み込まれていることをふまえて、家族成員間の情緒関係、家族規範意識、老後意識が、加齢とともにどのような変化をたどっているのか、あるいはコーホート間でどのような差異や共通性がみられるのか、コーホート内部はどのように層化しているのかなどについて、明らかにしていきたいと考えている。

【参考文献】

Elder, G. H. Jr,. *Children of the Great Depression : Social Change in Life Experience,* University of Chicago Press, 1974（本田時雄ほか訳『大恐慌の子どもたち－社会変動と人間発達』明石書店，1986）

Elder, G. H. Jr., The life course : *The Encyclopedia of Sociology,* Macmillan, 1992

Hareven, T. K. *Family Time and Industrial Time : The Relationship Between the Family and Work in a New England Industrial Community,* Cambridge University Press, 1982（正岡寛司監訳『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部，1990）

春日井典子「ライフコースと家族」，野々山久也編『論点ハンドブック家族社会学』2009．pp.239-242

正岡寛司「ライフコース研究の課題」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学９ライフコースの社会学』岩波書店，1996

三沢謙一他『現代人のライフコース』ミネルヴァ書房，1989．pp.i-vii

森岡清美「序説－ライフコースと世代－」森岡清美・青井和夫編
著『ライフコースと世代』垣内出版，1985
佐藤宏子『家族の変遷・女性の変化』日本評論社，2007
嶋崎尚子『ライフコースの社会学』学文社，2008
堤マサエ『日本農村家族の持続と変動』学文社，2009

表１　コーホート別にみたライフ・イベント経験時の平均年齢

歳（N）

ライフ・イベント＼コーホート	大正・昭和ヒトケタ生まれ	昭和10年代生まれ	昭和20年代生まれ	全　体
調査対象者の結婚年齢	23.2（107）	22.4（84）	22.9（62）	22.9（253）
夫の結婚年齢	25.8（107）	26.4（84）	26.6（61）	26.2（252）
出生児数*	2.9（107）	2.7（84）	2.5（62）	2.7（253）
第１子出産年齢**	25.0（105）	23.8（84）	24.2（60）	24.4（249）
末子出産年齢*	30.5（105）	29.2（84）	29.3（60）	29.8（249）
出産期間	5.9（ 99）	5.4（83）	5.2（58）	2.7（253）
子ども学卒の年齢	49.2（103）	48.1（84）	48.6（59）	48.6（246）
子育て期間	24.2（103）	24.3（84）	24.5（59）	24.3（253）
子どもが最初に結婚した年齢	50.8（102）	50.2（81）	50.6（47）	50.5（230）
初孫誕生の年齢	53.2（101）	51.8（77）	51.4（35）	52.4（213）
すべての子が結婚した年齢*	58.1（ 77）	57.5（47）	53.6（14）	57.5（138）
定年・農業からの引退	67.7（ 32）	59.1（16）	55.7（ 3）	64.3（ 51）
夫の定年・農業からの引退	67.6（ 48）	57.8（29）	53.3（ 6）	63.1（ 83）
夫死亡時の年齢	69.0（ 20）	57.0（11）	49.4（ 5）	62.6（ 36）

一元配置分散分析：$^{**}0.001 < p < 0.01$　　$^{*}p < 0.05$

表２　コーホート別にみた配偶者選択の方法

%（N）

	大正・昭和ヒトケタ生まれ	昭和10年代生まれ	昭和20年代生まれ
見合い	71.0	66.7	46.8
恋　愛	14.0	20.2	50.0
どちらともいえない	15.0	13.1	3.2
合　計	100.0（107）	100.0（84）	100.0（62）

χ^2検定：*** $p < 0.001$

表３　コーホート別にみた出生児数

%(N)

	大正・昭和ヒトケタ生まれ	昭和10年代生まれ	昭和20年代生まれ
０人	0.9	0.0	3.2
１人	5.6	1.2	3.2
２人	28.0	40.5	37.1
３人	41.1	47.6	53.2
４人	18.7	8.3	1.6
５人	5.6	1.2	1.6
６人	0.0	1.2	0.0
合　計	100.0(107)	100.0(84)	100.0(62)
平均出生児数	2.9	2.7	2.5
標準偏差	0.997	0.785	0.805

一元配置分散分析：* $p < 0.05$

出生コーホート間の多重比較の結果（Bonferroni）

「大正・昭和ヒトケタ生まれ」＞「昭和 20 年代生まれ」

表４　コーホート別にみた職業経歴

%(N)

	結婚前	1982年	1993年	2005年
大正・昭和ヒトケタ生まれ				
農 業	73.8(79)	80.4(86)	66.4(71)	57.0(61)
その他※	21.5(23)	11.2(12)	21.5(23)	7.5(8)
無 職	4.7(5)	8.4(9)	12.1(13)	35.5(38)
昭和10年代生まれ				
農 業	42.9(36)	70.2(59)	51.2(43)	56.0(47)
その他※※	47.6(40)	25.0(21)	44.0(37)	26.2(22)
無 職	9.5(8)	4.8(4)	4.8(4)	17.9(15)
昭和20年代生まれ				
農 業	16.1(10)	66.1(41)	37.1(23)	33.9(21)
その他※※※	83.9(52)	22.6(14)	53.2(33)	50.0(31)
無 職	0.0(0)	11.3(7)	9.7(6)	16.1(10)

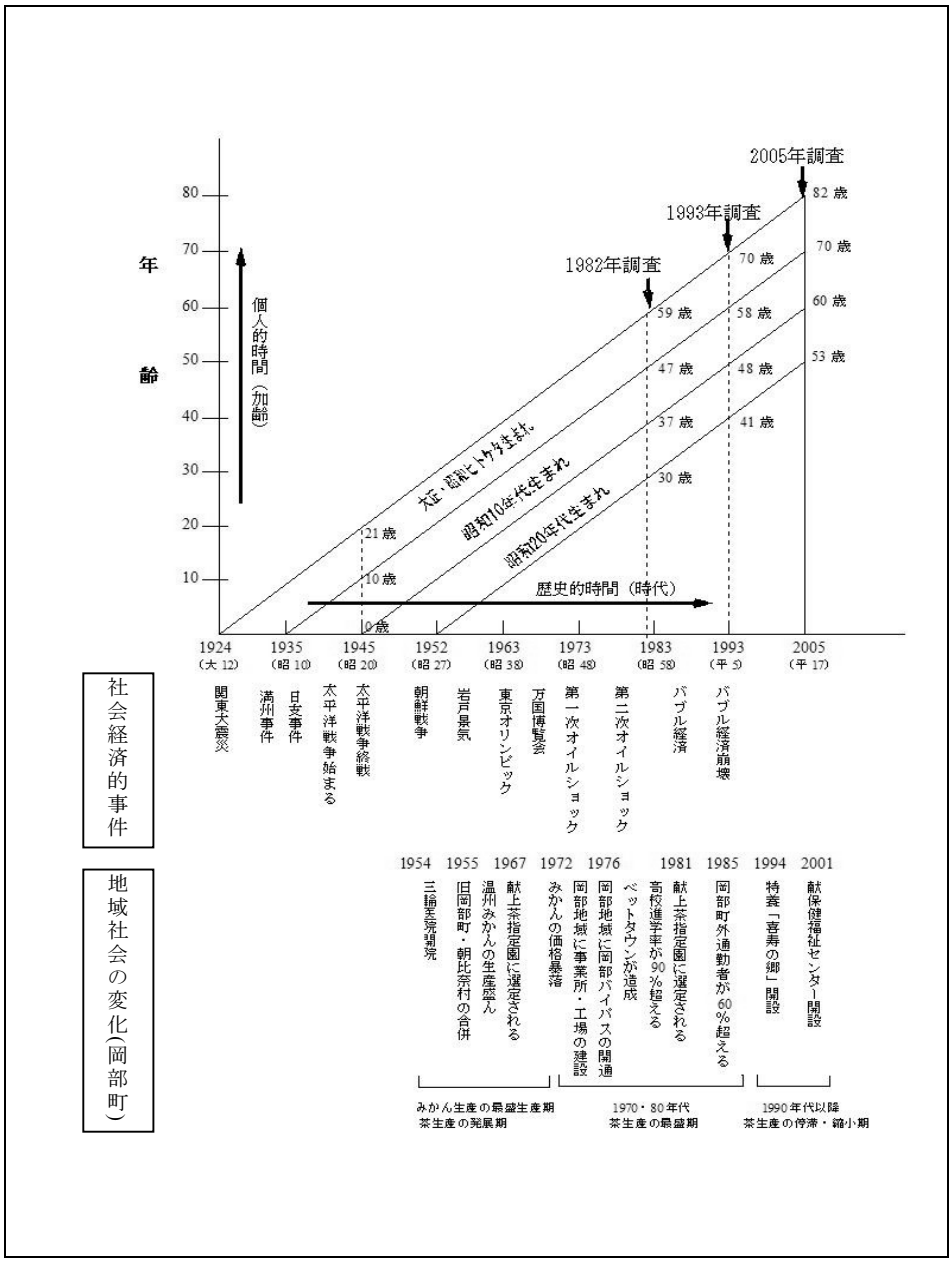
※その他：1982 年　管理事務職（２）　労務職（３）　商工自営（４）パート（３）
1993 年　管理事務職（２）　労務職（10）　商工自営（２）パート（９）
2005 年　管理事務職（１）　労務職（０）　商工自営（１）パート（６）
※※その他：1982 年　管理事務職（７）　労務職（11）　商工自営（２）パート（１）
1993 年　管理事務職（７）　労務職（18）　商工自営（４）パート（８）
2005 年　管理事務職（１）　労務職（４）　商工自営（３）パート（14）
※※※その他：1982 年　管理事務職（３）　労務職（３）　商工自営（４）パート（４）
1993 年　管理事務職（５）　労務職（10）　商工自営（４）パート（14）
2005 年　管理事務職（２）　労務職（７）　商工自営（４）パート（18）

表５　コーホート別にみた 1982 年から 1993 年への職業移動

%（N）

	1982年	1993年の職業					
	農業者人数	農業	管理事務職	労務職	商工自営	パート	無　職
大正・昭和ヒトケタ	100.0（ 86）	70.9（ 61）	1.2（1）	0.0（0）	0.0（0）	2.3（ 2）	25.6（22）
昭和10年代生まれ	100.0（ 59）	78.0（ 46）	0.0（0）	1.7（1）	1.7（1）	11.9（ 7）	6.8（ 4）
昭和20年代生まれ	100.0（ 41）	51.2（ 21）	0.0（0）	9.8（4）	4.9（2）	22.0（ 9）	12.2（ 5）
合　計	100.0（186）	68.8（128）	0.5（1）	2.7（5）	1.6（3）	9.7（18）	16.7（31）

図１　調査対象者の社会的・歴史的コンテクスト



（平成 22 年 9 月 7 日受付）